

開発的教育相談の進め方
— グループカウンセリングを生かして —

目 次

I	テーマ設定の理由	21
II	研究の仮説	21
III	研究の全体構造図	22
IV	研究の内容	23
1	教育相談について	23
(1)	学校教育相談とは	23
(2)	学校教育相談の機能	23
2	児童理解について	25
(1)	主観的理解について	25
(2)	客観的理解について	25
(3)	共感的理解について	27
3	開発的教育相談について	30
(1)	開発的教育相談のねらい	30
(2)	開発的教育相談の実践	30
4	学級の実態	31
(1)	日常の観察より	31
(2)	ソシオメトリック・テストより	31
(3)	登校感情調査より	32
(4)	潜在的登校拒否チェックテストより	33
5	グループカウンセリングについて	34
(1)	グループカウンセリングの必要性	34
(2)	グループ構成の方法	34
(3)	グループカウンセリングの効果	34
(4)	教師の役割	35
V	グループカウンセリングの実際	35
VI	研究の成果と課題	40
	<参考文献>	40

宜野湾市立志真志小学校

比嘉 千恵子

開発的教育相談の進め方 — グループカウンセリングを生かして —

宜野湾市立志真志小学校教諭 比 嘉 千恵子

I 研究テーマ設定の理由

高度情報化の今日、社会は大変複雑化し、人間の価値観も多様化している。また、物質的な豊かさの中で人間相互のふれあいや思いやりの心等の希薄化が進み、心の豊かさの必要性が言われるようになってきた。学習指導要領の改定が平成元年に行われ、「心豊かな人間の育成」「自己教育力の育成」「基礎基本の重視と個性教育の推進」「文化と伝統の尊重と国際理解の推進」の基本方針がうち出された。

本校でも「豊かな人間性を培い心身ともに健康でたくましい子どもの育成」を目標に掲げ、教科指導はもちろん、生徒指導、教育相談等の研修会を持ち、日々実践に取り組んでいる。それにもかかわらず登校拒否、場面緘黙、心身の不調を訴えて保健室を訪れる児童は一向に減る気配がない。

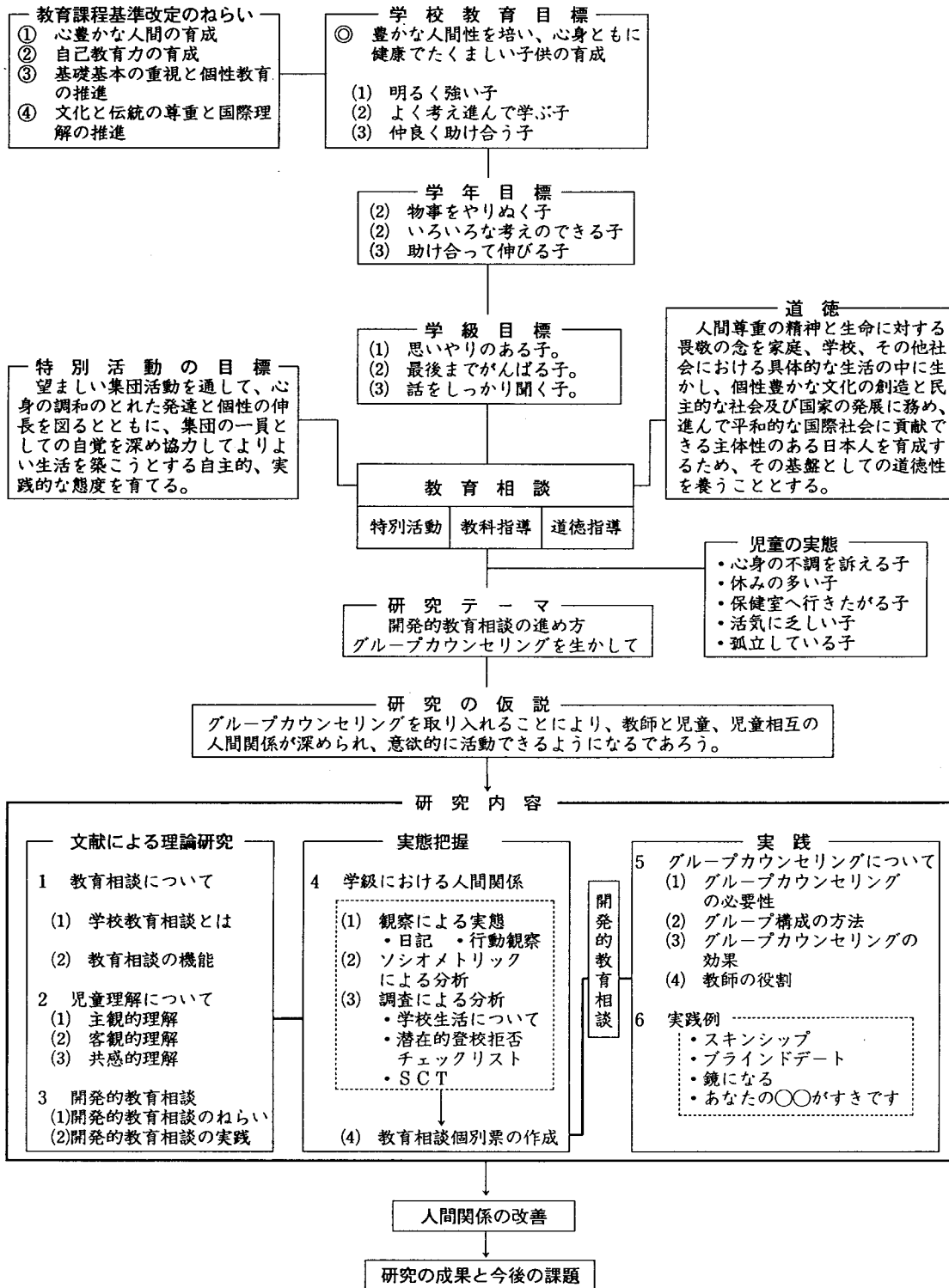
去年出会ったA君は3年から登校拒否が始まり、4年の2学期までは母親同伴で登校する日もあったが、母親が病気で同伴できなくなったことから、再び登校拒否になった。母親と話し合い、3学期の終わり頃、専門機関を紹介した。A君はかなり改善に向かったが登校するまでには至らぬ段階で5年に進級した。進級してからは、担任や養護教諭の努力もあって保健室への登校ができるようになった。

A君への指導を振り返ると、家庭訪問や電話での相談に終始し、学級としての取り組みも弱かったため適切な援助ができなかったことを反省している。A君が「楽しい」と実感できる学級作りができていれば、もっと早い時期に登校することが出来たのではないかと悔やまれる。登校拒否気味の児童、学習中に気分不良を訴えて保健室通いを繰り返す児童、何かと意欲に乏しい児童。このような児童は、他人に対して防衛的になり、自分の殻にとじこもったり、攻撃的になったりして、学級の中で友だちとの関わりがうまくできない。そこでグループカウンセリングを通して触れ合いを重ねることによって、心を開きお互いの良さを認め合い、一人一人を大切にす気持ちが育つと考えられる。その結果、学級が一人一人にとって存在感のある「居心地の良い場」となり、元気ある楽しい学級になると考え本テーマを設定した。

II 研究の仮説

グループカウンセリングを取り入れることにより、教師と児童、児童相互の人間関係が深められ、意欲的に活動できるようになるであろう。

III 研究の全体構造図



Ⅳ 研究の内容

1 学校教育相談について

登校拒否、校内暴力、いじめ等の問題行動の多様化多発化とともに、児童生徒の指導、関わり方の難しさがクローズアップされ、学校現場における教育相談の内容、方法についての手立が問われてきている。学校教育相談の内容、機能について考えてみたい。

(1) 学校教育相談とは

文部省の『児童の理解と指導』によれば、「教育相談は、一人一人の児童の教育上の諸問題について、本人または、その保護者、教師等に、その望ましい在り方について助言指導することである。つまり、個人の持つ悩みや問題の解決への援助を行うことによってその生活に適応させ、望ましい人格形成を図ろうとするものである」と述べている。

従来学校で行われてきた教育相談は、問題行動を持つ児童生徒の指導に重点が置かれがちであったが、問題行動の対処に追われ、児童生徒の心への関わりまでは及ばなかったため、根本的な解決を見出せず指導が空回りにおわる事が多かった。それは、学校が専門機関の教育相談の考え方や手法を受動的に受け入れてきたことにも原因があると考えられる。そこで、教師自らの実践を基盤にした教育相談の考え方、態度、姿勢、手法を拠り所として指導の見直しをする方向に変わってきた。

学校における教育相談は、「すべての教師によるすべての児童を対象にした、人格的成長への援助活動であり、各教科はもちろん、道徳、特別活動、時間や放課後または、当番活動、給食指導における教育活動等、どの場においても行われる教育活動である」という考え方が重視されるようになってきた。

(2) 学校教育相談の機能

学校教育相談は、教育課程に「補正作用」「補助作用」として学校教育のすべての場に働く「機能」とであると捉えられる。おおまかに下記の4つの機能にまとめることができる。

- 治療的教育相談

児童生徒の問題を共有しその根本的治療をねらいとし、解決をめざして援助する教育活動を言う。

- 訓育的教育相談

問題行動のある児童生徒に対し「気持ちは受容しても、行為は認めない」という姿勢で行う教育活動を言う。

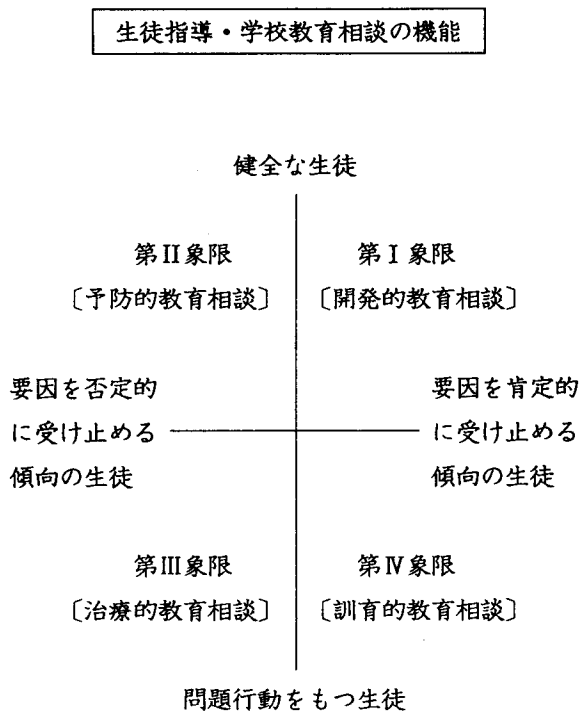
- 予防的教育相談

児童生徒の内面を理解することにより、充足感、安定感をあたえ自己洞察を図ることができよう援助する教育活動を言う。

- 開発的教育相談

児童生徒の課題を明確にし、その達成を目指し、一人一人が可能性を最大限に発揮するよう援助する教育活動を言う。

今井五郎氏は、教育相談の四つの機能を次の図で示し説明している。



- グラフの縦軸は健全な生徒(園児、児童、生徒の略)と問題行動をもつ生徒の軸である。縦軸の上端は最も健全な生徒で自分が環境に適応しているのみでなく、他の生徒も適応できるように環境に働きかけ環境を改善していく生徒である。
- 原点の近くは辛うじて適応している生徒。
- 原点より下は問題行動の兆しのある生徒。下端は問題行動の限りを尽くしている生徒とすることになる。
- 横軸は要因に関するものである。
「問題行動の背景には、かならず要因があり要因に目を向けない限り問題行動の立ち直りを図ることはできない。」と考えられてきたが、厳密に言うと要因でなく人格形成に影響を及ぼす要素(家庭環境、成育歴、学校環境、身体、能力、性格など)の受け止め方である。

例えば、「母子家庭」という要因に対し、
 A児は「お母さんが一人で働き、自分を育てている。早く成人してお母さんを助けたい。」
 B児は「お母さんが働いているので、学校から帰ってもだれもいない、おこずかいも少ないしこんな家に生まれて損だな。」と受け止める。

このように、同じ要素でも二人の受け止め方には大きな違いがある。
 A児のように肯定的に受け止めることができれば生活の励みとなるが、B児のように否定的な受け止め方は問題行動の要因になる可能性をもつ。

要因、行動の二つの尺度を用いると、子どもを二次元で捉えることができ、四象限に分けることができる。実際に自分の担任しているクラスの子ども一人一人を四象限に分類し、各象限に的確に位置づけることは容易ではない。横軸は感じ方、受け止め方で、生徒の内面に及ぶ尺度である。この内面を理解することが共感的理解と言える。生徒を二次元の世界で捉え、グラフ上に的確に位置づけるためには、正しい児童理解が不可欠である。

正しい児童理解のもとで、II～III象限の児童をI象限に変える援助をし、さらに自己実現を目指し援助することができる。

では、正しい児童理解をするために学級担任として心得るべき事はなにか考えてみたい。

2 児童理解について

学級という一つの集団にいる児童も、育った環境、成育歴、能力、性格、興味、適性などは、一人一人異なり、各々が独自性を持っている。この独自性についての理解を深める事が「望ましい人格の育成」につながると考える。児童理解をするためには、「観察」「面接」「検査」の3つがうまく機能することが大事である。学級担任として普段から児童の行動、言動に注意をはらうことはもとより、調査や心理テストなどを実施して児童の問題の原因を把握し、対応の仕方を考えることも必要である。

児童理解には、いろいろ方法があるが、教師が日常的に行っている理解の方法を振り返ってみると、(1)主観的理解、(2)客観的理解、(3)共感的理解などがあげられる。

(1) 主観的理解について

自分の過去の経験と照らし合わせて理解する方法で、誰もが行う素朴な理解の方法（経験で類推したり経験談を聞かせる等）であるが、それだけでは児童の内面に触れる事は出来ない。

(2) 客観的理解について

テストや調査の資料をもとにした理解をいう。児童を客観的に理解するためには、さまざまな側面についてのさまざまな資料が必要になってくる。児童一人一人の独自性を理解するために整えておきたい基本的な資料やその収集法について金子保氏の方法を参考にしたい。

① 児童理解のための資料収集の方法

理解すべき側面	資料の収集の方法	
	現在の様子	過去の様子
身体・生理的側面 ア 発育状況 イ 習癖 疾病歴	<ul style="list-style-type: none"> ・ 検査（身体測定） ・ 調査（保健調査票） ・ 面接（子供、親） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 母子手帳、検査の記録 ・ 調査（保健調査票） ・ 面接（子供、親）
知能・学業的側面 ア 幼児期の状況 イ 知能 学力検査	<ul style="list-style-type: none"> ・ 検査（知能、学力） ・ 面接（子供、親） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観察 ・ 指導要録、通知表 ・ 面接（子供、親）
性格・情緒的側面 ア 性格の傾向 イ 興味 関心 ウ 心理的外傷の有無	<ul style="list-style-type: none"> ・ 検査（性格、適応性等） ・ 調査（悩み、興味等） ・ 観察 ・ 面接（子供、親） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導要録、通知表 ・ 作文、日記など ・ 面接（子供、親）
環境的側面 ア 家庭・家族構成 近隣の状況 イ 学校・友人関係	<ul style="list-style-type: none"> ・ 検査（親子関係、友人関係） ・ 調査（家庭環境等） ・ 面接（子供、親） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作文、日記など ・ 面接（子供、親）

② 児童理解のための心理テスト・調査の活用

心理テストは外観の裏に隠されている子供の世界を知る道具であり、方法である。そして子供の世界を正しく理解し、子供の成長に役立つ為のものである。学級の児童の理解を深めるために、学校で利用できそうな心理テストから、その目的についてまとめてみた。

ア 人間関係の理解

「ソシオメトリック・テスト」や「ゲス・フー・テスト」

子供の交友関係を調べ孤立児や親和、排斥関係を数量的に診断するテスト。

「親子関係診断検査」

親子関係や親の養育態度を診断する。親が自分の態度を診断する親用と、子供が親を診断する子供用とがある。

イ 性格・人格の理解

人のパーソナリティーの分類をしたり、心理特性を量的に測定するもので、投影式と質問紙法がある。投影式は図や絵などの提示に対する子どもの反応を調べ、その子の深層の心理の動きを探ろうというものである。質問紙法ではテストの中で様々な行動や心理状態に関する質問が聞かれ、その結果から性格特性のプロファイルが分析される。

それぞれのテストの利用法について砂田和孝氏の資料を基に下記の表にまとめてみた。

テストの種類	テストの目的
TAT	絵画に描かれた状況をひとつの主題として捉え、物語を作成することにより、その児童の性格、あるいは人格の診断に用いる。
SCT (文章完成テスト)	短い刺激文「わたしは学校で」などのように、未完の文章を与え、それを各人の自由な記述で補わせて文章を完成させ、人格を診断する方法。
HTP (描画法)	家屋、樹木、人物、という課題を与え、画用紙に手描きさせ、それをその児童のパーソナリティと環境の相互作用を知る手掛かりとする。
バウム・テスト	画用紙に、鉛筆で樹木を描くことによりその児童の人格診断の手掛かりとする。
エゴグラム	人間相互の交流を分析することにより、自分の自我状態に気づき、自分を知ることにより、相手との交流を改善しようとするためのもの。

以上のテストの目的を把握した上で学級の児童の指導に生かしたい。ただし、子どもは日々成長、発達し、刻々考えも変わるから、検査結果を盲信したり、とらわれたりせず、あくまでも、児童理解の一つの手立てであることを忘れないようにしたい。

(3) 共感的理解について

心理テストや調査が外側からの児童理解であるのに対して、児童の内側から理解することをいう。C. R. ロージャースは、「来談者の私的な世界を、あたかも自分自身のものであるように感じる事が共感であり、しかも、その感情に巻き込まれないようにすることが肝要である」と説明している。学級の児童の心を否定も肯定もなく、「ありのまま」に受け止め内側から理解することが、共感的理解であり、共感的理解をすることが指導や治療に直結する。すなわち、児童は「自分の気持ちが分かってもらえた」と感じることで教師への信頼感が高まり、素直に自分自身を振り返り、問題行動を改め、良い方向へと向かう。共感的理解は児童の自己実現への大きな原動力となる。

共感的理解を得るには、児童との触れ合う機会を多くし、その中で感受していくのが一番良い方法といえる。高学年では面接法も利用できるが、言語が未熟な低学年では、遊びの場面を利用する方法が効果的である。

学級担任として児童一人一人を共感的に理解するためには、児童の発達過程を捉えることも大切であると考え、児童期の発達過程についてまとめてみた。

① 児童期の発達過程をとらえる

児童期の子どもは、心理的に比較的安定した時期にあるが、一年生と六年生では、物の考え方、友人関係、授業の受け方などはずいぶん違っている。また個々の子どもの発達する姿は多様であるが、そこには、共通な発達の型（発達原理）が見出される。子どもの心身の健全な発達を促すには、発達のすじ道についての正しい理解が必要である。

ア 発達の順序・方向性

言葉の発達が喃語から始まり、具体的思考から抽象的思考へ、自己中心性から社会性へと発達し、身体の発達が頭部から下部へ、中心部から周辺部へと発達していくように、個人によって速度に違いはあっても順序性・方向性は変わらない。順序を無視した経験の強制は、子どもに問題を生じさせる原因となる。

イ 発達の連続性

心身のいかなる特性も突然に出現するのではなく、前段階で準備された物を受け継いでいく。例えば、人への愛情は幼児期の母子関係から発達していくもので、幼児期に望ましい母子関係が形成されれば自然に次の発達へと展開していくように、ある時期の経験は、善し悪しを問わず、必ず後の発達に影響を与えることになる。

ウ 領域性

就学前は語彙の獲得量から、記憶力のすばらしさが伺えるが、推理力に乏しい。身体の発達では、身長体重の発達の次に生殖器官の発達。情緒面でも、低次な物から高次な物へと順次発達する。領域によって質や量が異なるのであるから教育においてもその時期や指導法を慎重に配慮する必要がある。

エ 相関性

歩行運動の発達は幼児の生活環境を拡大して精神発達を促進し、友だちとの遊びを活発にして適応の可能性を大きくする。

オ 個人差

子どもは、独自の速度と方法で発達を遂げる。一人一人の発達とその速度に合うような適切な指導が必要となる。

カ 臨界性

心の発達には、「最適な時期」をもつ。愛情の薄い幼児期を過ごしたために起こったと考えられるパーソナリティの歪みは、後からとり戻そうと思って可愛がってみても、欠落した部分を完全に埋め合わせることは大変難しい。

子どもには、その年齢にふさわしい教育が必要である。

② 児童期の発達課題をとらえる

子どもが自己の適応能力の水準を高めていくために、各々の発達の段階に応じ、順次学習していかなければならない課題を発達課題という。児童期の発達課題には、次の3つの課題があげられる。

ア ものを変化させた体験を通して、抽象の世界へ入ること

抽象の世界の獲得は、日常の遊びや手伝いなどの生活体験の蓄積が、言語や記号や映像といった、より抽象的な物事を整理する道具と出会い、相互に作用し合うことによって成し遂げられるものである。

イ 仲間たちとの生活を通して、自律へ向けて出発すること

仲間たちとの生活を通して、大人の価値観から抜け出す準備をする時期である。「仲間律」の支配する社会生活の体験があってはじめて、「自律」へと向かうことができる。

ウ 明日への期待と希望に胸をふくらませ続けること

低学年の子供たちは、大きくなりたい、立派になりたいという自分の成長への希望を持っている。ところが、高学年になるとこの大きな希望はしばみ、現実的になってしまう。これは、知性の現れであり、自己を客観的に捉えることが可能になったという、一つの進歩である。この時期において、自分の弱点に気づいたとしてもなお、自己への期待と希望を失わず、明日への期待や願いの実現に向けて生きていく姿を持続することが、最も重要な発達課題である。

「ウ」の『明日への期待と希望』は、「ア・イ」の発達課題の達成を基礎に獲得されるものである。その時期々々の発達課題の達成を可能にするために必要な援助ができるようにしたい。

③ 児童との信頼関係を高める工夫

児童の発達過程・発達課題をふまえた上で、学級の児童と信頼関係を高める具体的な関わり方について考えてみたい。

ア 班編成の工夫

班は児童が学校生活を過ごす上で、一番基になる集団であるので、居心地が良く、相互に高め合うことのできる集団になるように、ソシオメトリック・テストを生かし編成する。

イ 日記の活用

日記は、子供の内面（喜び、悲しみ、不満、悩み等）が現れることが多いので、返事は児童のありのままを受け入れるようにていねいに書く。

日記のやりとりを重ね個々の児童との信頼関係を深める。

ウ 給食時間の活用

給食時間は、班の中に入って児童の話聞く。何気ない会話の中から、教壇の上からは分からない児童の側面を知ることができる。

エ 係・当番活動を生かして

係・当番活動の日誌を利用し、活動中の児童の様子や気持ちを知る手掛かりにする。朝の会や帰りの会の、発言をうなずきながら聞きとめ理解を深める。

オ 授業中の関わり方を見直す

学習の主体は児童にあることを念頭におき、学習成立のための援助に力を入れる。

教育相談的な授業の心構え

- ・子どもの柔軟な思考を大事にする。
- ・子どもの言動の中にある真実を大切にすること。
- ・学級集団の呼吸を大切にすること。
- ・結果より思考の過程に焦点をおいて聴く。
- ・つまずきは、進歩への道しるべ。「どうしてこうなるのかな」の助言で自ら正答を見つけさせる。
- ・私語は、禁止する前に「正式な発言」として生かす。
- ・子どもを追い立てないで、じっくり待つ。
- ・子どもが自分の努力の足跡を把握できるように、自己評価の意識を高めていく。

カ 児童理解のために教育相談個別票を作成し、一年を通して児童の変容をみる。

教育相談個別表 氏名〔 〕 生年月日〔 年 月 日〕 保護者〔 〕 兄弟〔 〕

	ソシオメトリック	S C T	エゴグラム	日 記	行 動 観 察	グ ル ー プ カ ウ ン セ リ ン グ
一 学 期	◎ N ○ M ▲ T △ チェックリスト 点	物事を肯定的に受け止める方である。		学童で野球をしたこと、試合で活躍したこと。ドッチボールで優勝したこと。誕生会に学級の男子12人招待した。	4月から遊びの中心、皆をさそって運動場へ。 休み時間、教室の入口の戸のガラスを割る。(5月10日) T君とO君の喧嘩の仲裁をする(6月11日)	
二 学 期	◎ I ○ N ▲ T △ チェックリスト 点			野球の試合の話を書き続ける。試合で疲れて宿題が出来なかったことを書くことが多くなった。	授業中の離席、私語がふえる。 国語の学習で前向きな発言がふえた。 T君とのけんかで、じっと我慢しT君の興奮がおさまるのをまっていた。	母親から電話。S君の最近の態度が気になるとのこと。親子で話し合い、自分の態度を振り返り反省し、謝っていたとの電話。 グループカウンセリングで、「支え合うと力が倍になる」ことに気づき皆に教えていた。
三 学 期	◎ K ○ K ▲ T △ チェックリスト 1点					

3 開発的教育相談について

学校教育相談において、重要視されてきているのが開発的教育相談である。開発的教育相談のねらいについてまとめてみた。

(1) 開発的教育相談のねらい

開発的教育相談は、正常生徒にその可能性を確かめ、発達の機会を提供することによって高い水準の成績にまで高めてやることが強調される。それは生徒が入学してから卒業するまでの定期的な将来にわたる進歩の過程である。(ペータース)

危機状態に陥った時に介入するとか、相手が困ったり、相談を求めて来たときに応ずると言うのではなく、一般の幼児から青年まで、あるいは入学から卒業まで連続的、累加的に個人の発達に即して絶えず援助していく考え方にたっている。発達に伴って当面する発達課題をのりこえ、自分の能力を最大限に発揮できるように援助し、人格のよりいっそうの成長、発達を促すことを目的とする。

(2) 開発的教育相談の実践

人間は本来、自発的に学習し、自己を高めていこうとする欲求をもっている。

マズローは、人間の欲求として次の5つをあげ、それぞれの欲求には階層があるという説を唱えている。マズローの階層説は①の生理的欲求が満たされなければ、②の安全の欲求は芽生えない。また、②の欲求が満たされると③の欲求が芽生える。このように②から④までの欲求が満たされて初めて、自己実現の欲求が芽生えるという。

では、学級の児童はこれらの欲求が満たされているだろうか。①の欲求はともかく②の欲求からおびやかされている子もいる。

例えば、いじめ、仲間はずし、家庭の問題を抱えている児童などは毎日が不安で授業に身が入るはずがなく、自己実現の欲求などとうてい起こり得ない状況である。

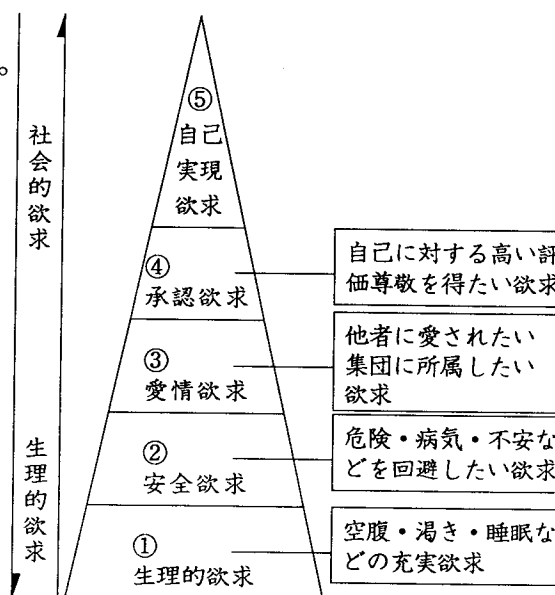
学級の中で、問題行動を起こす児童は、そこに至るまでになんらかのサインを出していたと思われる。このサインを早い時期にキャッチすることで適切な援助ができるのではないかと考える。

また、少々の不安は包み込んでしまうような居心地の良い学級づくりをすることも重要である。

居心地の良い学級をつくるために、学級の人間関係の掘り起こし、児童の内面を知り、児童の心を開かせるための触れ合いの場作りからはじめてみたい。

ソシオメトリック・テスト、登校感情調査・潜在的登校拒否チェックテスト、グループカウンセリングを生かし実践したい。

(マズローの欲求の階層)



4 学級の実態

(1) 日常の観察より (9月)

男子20人女子16人計36人。男子はたいへん活気があり学習中の発言も多い。女子はおとなしい子が多く皆のまえでの発言を嫌がる子が多いが、学級の仕事には積極的に係当番活動も女子が中心になって取り組んでいる。

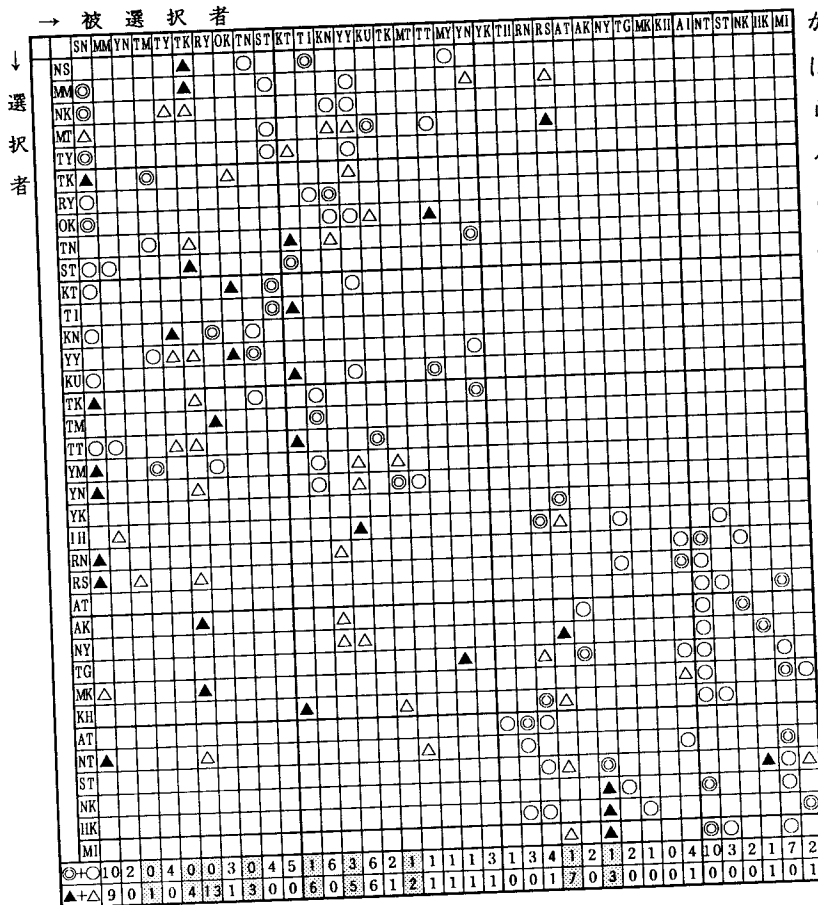
男女仲もよく、比較的まとまりのある学級である。しかし、級友とのトラブルが多いT夫、よく学校を休むY子、保健室へ通うM子、Y夫、登校拒否気味のI子、などは学年当初から気になる子たちであった。特に登校拒否のあったI子については、前担任からの情報提供があったので早くから対応することができた。2学期からは、級友ともすっかりうちとけて、笑顔が増え登校拒否の兆候はほとんどみられなくなった。

(2) ソシオメトリック・テストによる分析

ソシオメトリック・テストは集団における子どもたちの人間関係を深め、より快適に自主的に活動できるよう援助し、集団の質を高めることを目的としている。

「あなたが今一番遊びたい人はだれですか。」「遊びたくない人はだれですか。」という質問に3人ずつ順に選択させた。その結果を表したのが次の図(ソシオマトリックス)である。

(ソシオマトリックス)



男子の対人関係をみるとS夫を中心としたグループがあり、S夫を排斥する者はグループの外に追いやられるような形になっている。比較のおとなしい子がS夫のグループの外にいる。よく保健室へ行くY夫は、S夫を排斥し孤立している。T夫は多くの級友から排斥されて孤立している。排斥の理由として、「Tがすぐ怒り乱暴になる」ことを挙げている。男子の人間関係の改善を図り、支え合える関係を築きたい。

◎第一選択 ▲第一排斥
○第二選択 △第二排斥

(3) 登校感情調査より

児童の内面を知る手掛かりにするため登校感情についての調査をした。

ア 調査内容と結果

アンケート 4年 組 ()

次のことについて、あなたの考えや意見に合うと思う記号に○をつけて下さい。

1. あなたは、学校についてどう思いますか。(1つえらぶ)

ア. とても楽しい (17名) イ. 少し楽しい (7名) ウ. ふつう (5名) エ. 少しいやだ (6名) オ. とてもいやだ (1名)

2. それはなぜですか。(2つえらぶ)

ア. 勉強 (10名) イ. 友だち (27名) ウ. 先生 (1名) エ. きまり (1名) オ. 親、家族 (0) カ. やる気、気分 (4名)

キ. 上級生 (3名) ク. クラブ (9名) ケ. そのほか () (0)

3. 「学校へ行きたくない」と思ったことがありますか。

ア. はい (20名) イ. いいえ (16名)

4. 「ア」にまるをつけた人だけこたえてください。

「学校へ行きたくない」と思うのは、どんなときですか。

ア. 勉強がわからない (4名) イ. 友だちとけんかしたとき (9名) ウ. 先生におこられたとき (1名)

エ. 親におこられたとき (0名) オ. そのほか(眠たいから、上級生が嫌・・・) (6名)

5. 学校で気分が悪くなることがありますか。

ア. よくある (3名) イ. ある (6名) ウ. ふつう (4名) エ. ときどきある (10名) オ. あまりない (12名)

イ アンケートの分析・考察

- ・6割の子は「学校は楽しい」と受け止め「学校はいやだ」と言うのは、2割弱である。
- ・登校感情にかかわる項目では「友だち」が1番多く、学校が楽しいのも楽しくないのも友だちとの関係に左右されるということになる。
- ・男女ともおよそ半分が「学校へ行きたくない」と思ったことがあり、その原因のほとんどが「友だちとけんかしたとき」と答えている。
- ・「学校で気分が悪くなることがありますか」の項目でも、7割が「ある」と答えておりここでも友だちとの関わりが考えられる。

(4) 潜在的登校拒否チェックテストより

潜在的な登校拒否傾向の児童を把握したいと思いチェックテストを実施し、「友人関係」との関わりを調べてみた。

① 登校拒否の潜在的段階の発見のためのチェックリスト (甲斐志郎著)

● 児童用

	はい	わからない	いいえ
友だちが少なかったり、いないですか			
友だちはおとなしい人が多いですか			
同級生より下級生と遊ぶことが多いですか			
友だちがさそってくれないと避ばないですか			
友だちが話しかけても話さないことがありますか			
友だちにいじめられると先生に言いますか			
顔色がよくなく、元気がないですか			
食べ物に好ききらいが多く給食をよく残しますか			
運動がきらいで外で遊ぶことが少ないですか			
病気ではないのに体重が減ることがありますか			
授業中あまり発表しないですか			
先生が話かけてくれないと先生と話さないですか			
体育などきらいな教科がありますか			
友だちや先生からよい子だと思われていますか			
仕事はきちんとしないと気がすまないですか			
小さな失敗でもいつまでも気になりますか			
何かをする時に自分勝手だといわれることが多いですか			
何か決める時に迷って時間がかかることが多いですか			
自分の行動に自信がないですか			
1日の中で、たびたび気分が変わりますか。			

● 教師用

	はい	いいえ
友人は少ない、またはいない		
友人はおとなしい人が多い		
同年齢の子どもとはあまり遊ばず、年下の子どもとよく遊ぶ		
友人がさそわないと避ばない		
友人が話しかけてもあまり話さない		
友人にいじめられるとよく訴える		
顔色がよくなく、元気がない		
食べ物に好ききらいが多く、給食はよく残す		
運動をすることを好まず、外で遊ぶことが少ない		
病気ではないのに体重が減少する		
授業中あまり発表しない		
教師が話しかけないと話さない		
特定の教科をきらう (体育など)		
友人や教師からよい子だと思われている		
仕事はきちんとしないと気がすまない		
小さな失敗でもいつまでも気にする		
自己中心的な行動が多い		
事を決断するのに時間がかかる		
活動に自信がない		
1日の中で気分の変動が大きい		

はい……………2点 ・合計15点以上を潜在的
わからない…1点 登校拒否児童として抽出
いいえ……………0点 する。

・「はい」のチェック数が5つ以上ついた
時、潜在的登校拒否の傾向があるとみる。

② 結果 …………… 自己チェックにより抽出された児童の数 (11人)

番 号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
被選択者数	10	2	0	4	0	0	3	0	4	5	1	6	3	6	2	1	1	1	1	3	1	3	4	1	2	1	2	1	0	4	10	3	2	1	7	2
被排斥者数	9	0	1	0	4	13	1	3	0	0	6	0	5	6	1	2	1	1	1	1	0	0	1	7	0	3	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1
チェックテスト点	1	15	3	15	2	19	7	9	7	15	8	18	4	8	8	13	15	13	15	20	13	20	13	12	6	9	12	13	12	9	6	4	18	15	3	7

排斥されている児童が必ずしも、得点が高いとは限らないこと、また活発にみえる児童が高得点で抽出されるなど、意外な結果である。物事の受け止め方の違いなのだろうか。しかし、全体的な傾向としては、被選択者の数が少ない児童は高得点を示している。

学級の居心地の善し悪しが友人関係に大きく左右されることが伺える。そこで、グループカウンセリングを生かすことで、児童相互の理解が深まり良い仲間づくりができると考える。

5 グループカウンセリングについて

(1) グループカウンセリングの必要性

カウンセリングというのは、相手の行動の変容を目的とした、主として、言語を媒介とした継続的な援助活動を意味するが、それを集団で行うものをグループカウンセリングという。

グループカウンセリングの基本的な考え方は、すべての生徒の人間性を尊重し、ありのままの人間としての姿を重んずる集団の育成に努め、その中で好ましい人間関係や個人の成長を目指すものである。グループの中で話を聞いたり、自分を語ったりする過程で、なんらかの情緒的体験をし、何かを学び、成長し変容することをねらった人間関係経験の場である。

ところが、塾、稽古等、生活環境の変化等の影響もあり、学校外での人間関係経験の場が少なくなっている。一日の大半を過ごす学校生活の中で、人間関係経験の場をあえて設定する必要があると考える。学校生活の中で、心の底から楽しいと感じる時がひとときでもあれば、「明日への期待と希望を持ち」自己実現をめざす児童になるのではないかと考えて、朝の会や帰りの会、学級活動等、折りあるごとにグループカウンセリングをした。

(2) グループ構成の方法

学校で行う場合の構成人数は7～8名が適当である。グループの構成の方法として宮本裕子氏は次の4通りの方法を挙げている。今回は、②の方法で、グループを構成した。

① 自然発生的なインフォーマル・グループ

(仲良しグループ・非行化傾向を持つグループ等) 治療的・矯正的な意味を持つ。

② 学級におけるフォーマル・グループ

(生活班・学習班等すでに編成されているグループ) 治療だけでなく班の人間関係や活動・班討議の場の意味を持つ。

③ 教師が選定するグループ

(孤立児・登校拒否傾向の子を含むグループ) 治療的意味を持つ。

④ 希望生徒を募る

(興味・関心を共有するグループ) 人格の向上を目指す、開発的な目的を持つ。

(3) グループカウンセリングの効果

対一で行われる個別カウンセリングに比べ、限られた時間内で多くの子供に実施できる上に、小集団で行うので個別では緊張するという子でも気軽に参加出来るという利点がある。

〔受容〕 集団やメンバー、教師に自分を受け入れてもらえる体験の中から、仲間意識が生まれ、孤立感が解消する。

〔普遍化〕 他の人との共通性の発見や同じ悩みをもっているという安心感と受容される体験が情緒安定につながる。

〔現実吟味〕 現実に気づく体験を通して、人間関係や家族関係を再検討する。

〔愛他性〕 メンバーや教師からの元気づけ、忠告、解釈、示唆などを通して相互に援助し合う。

〔転移〕 本来は身近な人に持っていた抑圧された感情的なものが、集団、メンバー、教師に対してグループの中で表される。

〔観察効果〕 他人を知り、他人を見習うことによって、自己を客観視し見つめ直す。

〔相互作用〕メンバーの人間関係や雰囲気を通して、相互に学び合い影響を与え合う。

〔知性化〕他の人や自己についての理解、解釈が深まる。

〔通風作用〕カタルシスや種々の自己表現、行動などによって緊張が解消する。

(4) グループカウンセリングにおける教師の役割

児童が心を開き積極的に話し合いができるように、和やかな雰囲気をつくる。グループカウンセリングはメンバー一人一人の発言によって進められて行くので時には、特定の児童の発言が長かったり対立したりすることもある。そこで教師は発言者や他のメンバーの気持ちを的確に察知し、適切な対応をする必要がある。

V グループカウンセリングの実際

1 リレーションづくり

(1) 肩に手を置く…………… スキンシップの体験 (12月1日 朝の会)

列になって座るか、円になって座る。

目を閉じてリラックスし、前の人の右肩、または右隣の人の左肩にそっと手を置く。

手の先や肩に注意を向け、どんな感じがするかを意識化させる。2～3分続ける。

スキンシップでは、はじめ照れくさがってなかなか相手の肩に手を置こうとしない子もいたが、

肩を手にした時の感じは……?



回を重ねるにつれて照れがとれて、真剣な面持ちで臨むようになった。相手と触れ合い、意識を集中させることで、気分の切替えが上手になる。

学芸会の練習から国語や算数の学習に入る時など効果的であった。苦手だと思っていた相手が優しく手を置いてくれた時の意外な気持ちから相手への認識を改める等、些細な行為だが児童が受ける効果は大きい。

(2) 後ろにたおれる。…………… 信頼関係の体験 (12月1日 朝の会)

二人一組。同じ方向に向き、十五センチ位間隔をおいて足をそろえて立つ。

前の児童は、目を閉じたままそっと後ろにたおれかかる。

後ろの児童は、しっかり支えて元にもどしてやる。

二人の間隔を大きくしないですると恐がらない。

15度くらい傾いたら支えるという体勢がよい。人を信頼していないと倒れるのは大変怖いものである。恐がると脚をまげて倒れたり、倒れかかってすぐ足を出したりして自己防衛態勢をとってしまう。また、恐いから目を開けたままの者もいるが信頼関係が深まるにつれて「安全だ」という感じがうまれてくるから、人に身を委ねることができるようになる。

(3) 鏡になる…………… 自己開示の体験 (12月6日 学級活動)

二人一組になる。腕や脚や身体をつかっていろいろと動作をし、もうひとりがそれをそっくりまねる。交代でまねする側になったり動作する側になったりする。

後で、感想を述べ合う。

向き合った「鏡」を突いたり、撲ったりするような動作はしないことを約束する。

(4) 肩たたき スキンシップの体験 (12月3日 朝の会)

二人一組。

肩をたたく人は、卵をにぎっているような手の形にして手首を軸に指先でトントンとたたいてやる。肩から首筋、背筋へとマッサージのように軽くたたく。

2～3分で交代する。

また、一人が馬とびの時の体勢をし、もう一人が両方の手の平でパタパタたたく。

お互いどんな感じがするか味わう。

(スキンシップの感想)

(スキンシップ後の話し合いの様子)

でも男子がぶんぶんかたに手をあぐらいたかたけとおもしろかったけどだけと女子はあんまりおもしろくないからうれしかった。でもおもしろくないからうれしかったからおもしろい。



春佳さんのかたにおくし、とてもいい気分になりました。春佳さんの心が見えてきて春佳さんはとても心が広いな、と思いました。

(5) ブラインドデート 自己開示の体験 (12月8日 学級活動)

自分の特徴をわかりやすく表現し、それを互いに確認することにより、緊密な人間関係をつくる。

筆記用具と紙を準備し、5分の間に自分の特徴を書く。紙の裏に小さく名前をかき、男女別に集める。それを誰かに読んでもらい、誰が書いたものかあてる。

(児童が書いた自分の特徴)

(ブラインドデートの感想)

ブラインド、デート

○自分のとくちょうをくわしく書きましょう。

4年 糸目 <

○ブラインド、デートの感想はどうですか。

1. とても楽しかった 2. 楽しかった 3. 少し楽しかった 4. 楽しくなかった。

自分のものが読まれたとき、どんな気持ちでしたか。また、当ててもらったときどんな気持ちでしたか。

ヘアバンドをつけています。
人の子です。
たいじゅは、30kgです。
赤いトレナーをつけています。
すぐ泣きます。
体育が大好きです。
女の子です。

人々は、かわったとくちょうがある人だなと思いました。

ながぞきをしています。男たてです。
はんぞボンをきいています。
ひとりごです。
いづもえをかいてるようにないます。
大またではあるきがでます。
まるがまです。
たいじゅうは36キロデース。

自分のものをいわれるときは、ときどきしました。だけど、いろいろなんのことがいろいろわかった。とてもおもしろかったです。

(ブラインドデートの感想)

読まれた時
 {とてもドキりました}
 当てられた時
 {とてもうれしくてなせかほとしまけ}

自分がおまれたときドキりました。
 当てられたときとてもうれしかったです。



6つのゲームの中で、ブラインドデートは子ども達が一番好んだゲームである。5分という限られた時間内で、自分の特徴を実にうまく表現できる子もいれば、3行程度で終わってしまう子もいた。しかし、子ども達は自分の持っている情報を集めて、全員をみごとに当てることができた。当てられた時の本人は、照れくさそうにしながらも満足気であった。このように、学級の全員の意識が自分に向けられることで、「学級の中に自分の存在」を少しでも感じたのではないかと思う。

(6) あなたの〇〇が好きです。…………… 自尊感情を高める経験 (12月10日 学級活動)

友だちのよい点を探し、その人に伝え、友達からも好きなところを言ってもらう。グループで輪になって、一人にスポットを当てて、好感がもてるどころや長所を全員で一言づつ言ってもらう。交代で、全員がスポットライトをあびる。

(「あなたの〇〇が好きです」の感想)

4年 組 名 前 〇〇
 ・「あなたの〇〇が好きです」のゲームはどうでしたか。
 1. とても楽しかった。2. 楽しかった。3. 少し楽しかった。4. 楽しなかった。
 ・誰かに褒めたことがあったら書いて下さい。
 私は、自分でいいところなんて、ないと思っていました。
 でも、いいところをみんなかい、てくれたので、うれしかったです。

・誰かに褒めたことがあったら書いて下さい。
 たすく君とかはたんさんいかに
 とかあつた。
 わるいことより、いいことがたんさん
 あると思った

・誰かに褒めたことがあったら書いて下さい。
 おんがら自分のいいことをいってもらってうれしかったです。
 いろいろ褒められたので、自分に自信が持てたのがよかった。

「あなたの〇〇が好きです」では、自分をマイナス評価しがちな子には、とても良い効果があり、グループの皆から長所を言われる度に笑顔がふえてきた。自尊感情が高められつつあることが伺える。また、他の児童も「誰にも必ず良い所がある」ということに気づき、自他を認め合うようになると思う。

このようにゲームを進めていくと、子どもたちはリレーションを心待ちにするようになってきた。

今回は、検証授業も兼ねて、一時間たっぷり使ってリレーション作りをすることにした。

(7) 学級活動指導案

(グループカウンセリングの実践)

平成5年12月22日 (水) 2校時

第4学年5組 男子20名 女子16名 計36名

授業者 比嘉 千恵子

1 主題 リレーションづくり

2 主題設定の理由

人間は本来、他の人とうまく触れ合いたいという願いをもっており、自分を心から理解してくれる相手がいれば辛い状況をのりこえる力がつき、それとは逆に疎外を受けたりすると持っている能力さえも充分発揮できない。発達段階からみると、4年生は「ギャングエイジ」と呼ばれる程、仲間意識が強く現れ集団としてのエネルギーが大きくなる年令である。この時期に仲間ははずしやグループ同士の喧嘩も起こりやすい。

本学級の児童も二学期後半になり、ギャングエイジ特有の仲間中心、排他傾向がみられるようになった。ソシオメトリック・テストや調査等の分析からも疎外され孤立している者がいることがわかった。また児童も自分の学級を「仲の良い学級」「満足できる学級」と感じている者は少ない。その理由として「喧嘩が多い、自分勝手をする者がいる、強い子の意見に抑えられる」などをあげている。このままの状態では、児童にとって居心地の良い場とは言えない。そこでグループカウンセリングを通して身体と心の触れ合いを重ねることで嫌だと思っていた相手の良さや、恐いと思っていた相手の優しさに気づき、構えていた心がほぐれ、ありのままの自分をみせることができるようになる。このように、児童相互の人間関係を改善し自他を認め尊重し合える学級集団に育てていくために本題材を設定した。

3 本時のねらい

- (1) 楽しい遊びを通して、学級の人間関係をより親密でなごやかなものにする。
- (2) 相手を受け入れることの必要性、協力することの大切さに気づく。

4 行動目標

- (1) 自分から進んでゲームに参加することができる。
- (2) グループのメンバーと協力し励まし合いながら楽しく過ごすことができる。
- (3) 普段、親しく交わることの少ない友だちとも仲良く楽しく過ごすことができる。
- (4) 相手の立場に立って、話を聞くことができる。

	児童の活動	教師の活動・指導上の留意点	期待される児童の変容
導入	1. グループごとに並んで教師の話を聞く。 2. ゲームのしかたがわかる。	1. 本時のねらいと活動について話す。 2. ゲームについて説明する。	○教師の話をよく聞こうとする態度がある。 ○ゲームへの興味・関心が高まる。
展開	3. ウォーミングアップをする。 ・目を閉じてリラックスし、右隣の人の肩にそっと手を置く。感想を発表し合う。 ・音楽にあわせて教室の中を自由に歩き回り、すれ違う人と握手したり、ベルの合図で身体の各部分をくっつけ合う挨拶をする。感想を発表し合う。 ・1つの椅子に、全員が早く立てるように協力する。 ・2つのグループずつ交代で行う。	(挨拶ごっこ)(肩に手を置く)の説明をする。 ・自分の手の先や肩に注意を向けどんな感じがするか意識させる。 ・みんなとスキンシップの体験をすることによって心身の緊張の開放を図る。 ・次々と違う人と挨拶することを指示する。 ・(団結の樹)の説明をする。 ・早く全員が早く立てる方法を工夫させる。	○手を置く相手への関心が高まる。 ○恥ずかしい、照れくさい気持ちさがとれてくる。 ○心から楽しいと感じる。 ○協力する喜びを味わう。
まとめ	4. ウォーミングアップをしたの感想を発表する。 ・グループ内で、一人ずつ自分の感じたことを話し、みんなの前でグループの代表が発表する。 5. 次はグループごとに活動することを知る。	・発表者が安心して話せるように静かに聞くことを約束させる。 5 次時の予告をする。	○相手の立場を理解し、認め合う雰囲気が出る。 ○自分の考えを皆に発表することができる。 ○グループカウンセリングへの期待をもつ。

2 授業を終えて

研究員にお願いして、日頃から気になっていたI子、M子、S夫、T夫、に焦点を当てて他の児童との関わり方を観察してもらった。

T夫は、不安気に握手を求めていたが、皆が笑顔で返したので、積極的になった。団結の樹では、タイマーを引き受けたり、うまく立てないグループにアドバイスしたり生き生きと活動していた。

I子は挨拶ごっこでは自分から手を出そうとはしなかったが、相手が求めてくると笑顔で返していた。
最後の発表では、グループ代表として堂々と発表していた。

M子は、初めは遠まきに皆を見ていたがゲームが進むにつれて笑顔がふえ、団結の樹ではグループの仲間に指示を出していた。

遊びの中では児童の本音が表れやすいため、児童の人間関係がかなりはつきりわかる。

これまでに、お楽しみ会等でよくゲームをしたが、単に「楽しかったね」で終わってしまうことが多かった。同じようなゲームでも、「ねらいを示し、終わったら必ず話し合いの場を設定し、相互理解を深める」ということを重ねていけば、自分をみつめ、他人の立場も考えることのできる子に育つと感じた。

3 資料

(1) エゴグラム

児童が自分の性格の傾向を知り
人間関係の改善に役立てる

エゴグラム・チェックテスト
年 級 名 前 ()

以下の質問に、はい (○)、どちらともつかない (△)、いいえ (×) のようにお答えください。ただし、できるだけ○×で答えるようにしてください。

		○	△	×
1	あなたは、何ごともしちっぴんときどき嫌いな気分がたまります。			
2	人がまちがったことをしたとき、なかまが許しませんか。			
3	自分を責任の強い人間だと思えますか。			
C 4	自分の考えをゆずらないで、最後までおし進みますか。			
P 5	あなたは礼儀、作法についてやさしいしつけをうけましたか。			
6	何ごともしちっぴんときどき嫌いな気分がたまります。			
7	親からなにか言われたら、その通りにしますか。			
8	「だめじゃないか」「…しなくてはいけぬ」という言い方をしますか。			
9	あなたは時間やお金にムズなことが嫌いですか。			
10	あなたが親になったとき、子どもをきびしく育てると思えますか。			
1	人から道を聞かれたら、親切に教えてあげますか。			
2	友達や年下の子どもをほめることがよくあります。			
3	他人の世話をするのが好きですか。			
N 4	人の思っているよりも、よいところを見るようにしますか。			
P 5	がっかりしている人かいたら、なぐさめたり、元気づけてやりますか。			
6	友達に何か買ってやるのが好きですか。			
7	助けを求められると、私にまかせなさい、と引きうけますか。			
点 8	だれかが失敗したとき、責めなさいで済ましてあげますか。			
9	弟や妹、または年下の子をかわいがるほうですか。			
10	食べ物や着る物がない人がいたら、贈ってあげますか。			
1	あなたはいろんな本をよく読むほうですか。			
2	何かうまくいかなくても、あまりカッとなりませんか。			
3	何か決めるとき、いろいろな人の意見を聞いて参考にしますか。			
A 4	はじめてのことをする場合、よく調べてからしますか。			
5	何かする場合、自分にとって損が利かよく考えますか。			
6	何か分からないことがあると、人にきいたり、相談したりしますか。			
7	株の調子の悪い時、自責して無理しないようにしますか。			
点 8	お父さんやお母さんと、冷静に、よく話し合いますか。			
9	勉強や仕事をきびきびと片付けていくほうですか。			
10	連絡やうらななどは、絶対に拒むないほうですか。			

(2) S C T (文章完成テスト)

児童の書いた文から児童の考え方の傾向 (要因を+の受け止めるか、-に受け止めるか) を知り、指導の手立てにする。

1	あなたはおしゃべりが好きですか。					13	私はよく_____	
2	賢くさかしたり、はしかりたりするのが好きですか。							
3	「わあ」「うげー」「かっこいい!」などの感嘆詞をよく使いますか。					14	私がしりたいのは_____	
F 4	あなたは面白いことを遠慮なく言うことができますか。							
C 5	うれしときや悲しい時、顔や動作に自由に表すことができますか。					15	学校で私はいつも_____	
6	ほい物は、手にいれないと気がすまないほうですか。							
7	異性の友人に自由に話しかけることができますか。					16	私は友だちから_____	
点 8	人に冗談を言ったり、からかったりするのが好きですか。							
9	絵をかいたり、歌をうたったりするのが好きですか。					17	先生がもっと私に_____	
10	あなたはイヤなことをイヤと伝えますか。							
1	あなたは人の顔色をみて、行動をとるようなくせがありますか。					18	私とくいなことは_____	
2	イヤなことをイヤとかわらぬ、おさえてしまうことが多いですか。							
3	あなたは劣等感が強いほうですか。					19	私が努力しているのは_____	
A 4	何か頼まれると、すぐにやらないで引き延ばすせががありますか。							
C 5	いつも無理をして、人からよく思われようと努めていますか。					20	自分でできないことは_____	
6	本日の自分の考えよりも、親や人の言うことに影響されやすい方ですか。							
7	楽しみや優つた気分になることがよくあります。					21	母より父のほうが私を_____	
点 8	あなたは遠慮がちな消極的なほうですか。							
9	親のごきげんをとるような面がありますか。					22	私の父の仕事が_____	
10	内心では不満だが、表面では満足しているようにふるまいますか。							
●この表に得点を書きこんでください。採点方法 ○2点 △1点 ×0点							23	時々気になるのは_____
20								
18						24	家でよくいわれることは_____	
16								
14						25	私は学校の成績が_____	
12								
10								
8								
6								
4								
2								
0								
	CP	NP	A	PC	AC			

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 児童理解についての理論を学ぶことで、児童の見方が変わった。教師が見方を変えれば児童の多様な面が見え、ゆとりをもって接することができる。(問題行動に隠された児童の内面を理解しようとするので、行動だけで評価することがなくなった)
教師と児童との信頼関係が高められた。(児童の日記に本音が書かれるようになった)
- (2) グループカウンセリングをすることで、児童相互の理解が深まり、絶えず自分を振りかえる(相手の立場になって考える)習慣がついた。自分から集団に入ることが苦手な子でも自然にとけこむことができた。
- (3) 教育相談個別票を作成することで、児童を統合的、継続的に捉えることができた。また、学期末の教育相談(個人面談)に活用することで父母の理解・協力を得ることができた。
- (4) 心理テストを利用することで、学級の全体的な傾向がつかめ、悩みを持つ児童の早期発見、援助ができた。

ソシオメトリック・テストから 排斥の多い児童(10月9名 ⇒ 1月6名)	潜在的登校拒否児数から (10月11名) ⇒ (1月4名)
---	----------------------------------

2 今後の課題

- (1) 児童の自己実現を促すため、心理テストの活用、事例収集を続け、成長していく児童へより効果的な援助ができるようにしたい。
- (2) 教育相談の年間計画(学級経営年間計画への位置づけ)作成。
- (3) 「共感的理解をすることが、治療に直結する」ということを忘れずに、毎日の関わり方について更に実践を積み重ねていきたい。

3 おわりに

研修期間中、きめ細かな御指導御助言を下さった県立センターの宮城孟栄先生をはじめ、研修の機会を与えて下さった嘉手苅所長、志真志小の桃原校長、お世話になった諸先生方に厚く感謝致します。

<参考文献>

全国教育研究所連盟	だれもが身につけたい生徒指導学校教育の技法	ぎょうせい	平成5年
全国教育研究所連盟	学級担任による教育相談の展開	全教連業書	平成元年
今井 五郎	学校教育相談の実際	学事出版	1992年
小泉 英二	学校教育相談・初級講座	学事出版	1991年
小泉 英二	学校教育相談 中級講座	学事出版	1991年
国分 康孝	教師と生徒の人間づくり	歴々社	平成5年
尾崎勝・西君子	カウンセリング・マインド	教育出版	1985年
小泉英二・高橋哲夫	学校教育相談の理論・実践事例集 No.16 No.19	第一法規	平成元年
十束 文男	カウンセリング・マインドが生きる教師の活動	文教書院	1989年
多田 俊文	実践・問題行動体系2	開隆堂	1991年